

うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンピラ
 第28号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0156
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486

小禄の教育風土記（その3）

—ある小禄少年の教育体験—



赤嶺 健治
 （うるくの歴史と文化を語る会 代表）

私は、青春時代には、カール・ブッセの「山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ」という言葉に魅かれたのか、身の周りの事よりも、遠い世界の事象へのあこがれが強かった。大学と大学院で、遠いイギリスやアメリカの言語と文学を専攻し、2003年3月の定年まで40年間、英語、英米文学を教えることをなりわいとしながら、アメリカ文学とアメリカ学についての研究を続け、県内外の学会でも数回研究発表を行った。

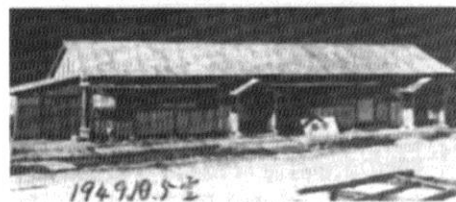
しかし、還暦の頃に、ニーチェの「足元を掘れ、そこに泉あり」（価値あるものは自分の身近な所にある）という名言を思い出し、身の周りのことや出身地の歴史と文化に興味に移った。それで、定年1年前の2002年に「うるくの歴史と文化を語る会」に入会し、多くの愛郷心豊かな同志と強い絆で結ばれて現在に至っている。

初めに、自分の出自について述べたい。私は、南洋群島テニアンで結婚し、大阪へ出稼ぎに行った両親（旧小禄村字具志出身の父と旧首里市中大町出身の母）の長男として1938年に大阪市此花区で生まれた。1944年4月に大阪市此花区の島屋国民学校に入学した。空襲が激しくなったため、2年生になった1945年4月から半年間、滋賀県の山村へ集団学童疎開をした。終戦後、1946年9月に米軍輸送船で沖縄へ引き揚げ、中城村の久場崎に上陸した。しばらくの収容所生活の後、津真田のテント葺き、ツーパイフォー工法の二世帯用規格住宅に落ち着いた。要するに、私は戦前の小禄のことや沖縄戦のことを、本や資料でしか知らない「うるくんちゅー」であるという訳である。

1946年10月に高良の米軍倉庫跡を利用した小禄初等学校の3年に編入した。同校は、翌1947年1月に高良初等学校に改称された。3年生の教室は米軍のトタン葺きモータープール跡であったが、4年生になった時に担任と生徒と一緒にテント屋根の木造教室を建築した。机と腰掛は、生徒自身が家で制作したものを持ってきた。並べてみたら、高さや大きさがまちまちで凸凹だった。教室は、6年生の時でも、まだ茅葺で土間のままだった。1950年3月、高良初等学校を卒業し（5期）、4月高良中等学校に入学した。52年4月1日学制改革により高良中学校に校名変更があり、53年3月卒業した（同じく5期）。卒業式の会場は、小禄劇場だった。54年4月高良中学校は新設の小禄中学校へ移行したので、高良中学校は消滅し、幻の母校となった。

初等学校時代の教師による体罰のことが忘れられない。あの頃は、家庭訪問の時に、生徒の親が、「先生、うちの子が言うことを聞かないときは、叩いてください」と言っていた。それで、びんたやげんこつは普通だった。しかし、旧日本軍の体罰の名残かと思われるようなひどい体罰があった。右手のびんたと同時に左足で足払いして倒され、鼻血を出した生徒がいた。板でふくらはぎをたたき、炎天下のサンゴ敷校庭で長時間正座させる、Lサイズ白墨が無くなるまで黒板を擦れ！という罰が脳裏に焼き付いている。後遺症が残った罰は、あるクラスの全員が手の甲にお灸を据えられた罰だった。卒業後何年も経ってから開いた同期会でも、手の甲を差し出すだけで同級生だったことが分かる印となっている。当時の体罰は、今なら、大きな暴力事件になるに違いない。

高良初等学校職員室（1949年10月）
 『高良小学校創立50周年記念誌』17頁より
 完成したトタン屋根職員室（10月）



終戦直後の食料事情は劣悪だったが、高良の配給所から無償配給されたアメリカの食料品は初めて見るものばかりで、食べ方が分からず試行錯誤した。アイスクリームやジュースの粉末はそのままなめ、乾燥ポテトはそのままかじった。箱入りの米軍携帯食(K-レーション)は、ビスケット、チョコレート、チーズ、ミートとエッグ、チューインガムなどが詰まった宝石箱のように思えた。高良の市場前で出会ったアメリカ兵に「ギブミーチューインガム!」と叫んでたかった生徒は、翌日の朝礼で、全校生徒の前で呼び出された。小中学生の間で、今思い出すとぞっとして冷や汗をかく遊びがあった。宇栄原や今の新部落のあちこちにあった防空壕に大量に残されていた火薬や小銃弾を持ち出し、火薬は花火遊び、小銃弾は手作りの鉄砲で実際に空に向かって発砲したりして遊んでいた。幸い私たちは怪我も事故もなくすんだが、当時宇栄原にあったコンセットの病院の窓から、ポケットに一杯詰め込んだ火薬が燃えて大やけどをした少年が数名収容されているのを見て身震いした。地雷が埋まったままの畑も何か所かあった。

高良中等学校2年(1951年7月9日)

前列左から4人目が筆者、5人目が担任の赤嶺信夫先生。



中学生の頃は、小遣稼ぎに色々な経験をした。確か宇栄原にあった米軍のゴミ捨て場(沖縄ではチリ捨て場と言う)、特に飛行機捨て場で拾い集めた鉄屑や銅屑、機械部品などを那覇に持って行って売ったりした。具志の自治会では、畑を荒らすネズミ駆除のため、ネズミのしっぽを買い上げてくれたので、早朝登校前に畑にネズミ捕り10個くらい担いで行って、方々に仕掛け、前日に仕掛けた10個を回収する作業を何年も続けた。たまに仕掛けた場所が分からなくなって、回収できないこともあった。

家庭は兄弟姉妹6人で、家計に余裕が無かったので、アルバイトで稼ぐ必要があった。中学3年の夏

休みに米軍那覇航空基地の事務所掃除の仕事をした。高校時代には、毎年春に開催される沖展の会場設営から展示場の掃除や警備をした。また那覇劇場で開催された城岳同窓会の小那覇舞天が主役の芸能大会の舞台装置の作業を行った。

大学時代には、首里城跡にあった旧琉大キャンパスの草刈り、琉大図書館の清掃作業、交通量調査、アンケート調査、瀬長島火薬庫の夜警、米軍基地内での土木作業、英字新聞の購読勧誘、劇場でのジュース売り、英語翻訳、家庭教師などを経験した。草刈りは、中学生の頃、父親が具志の屋敷内で養豚をしていて、豚舎の敷草を確保するのは私の役目だったので慣れた作業だった。図書館の清掃作業では、タイル床にワックスをかけて磨く機械の扱い方を覚えた。交通量調査では、早朝山川交番前に座って、車種別の通過台数を記録した。アンケート調査では、家庭を回って聞き取り調査を行った。瀬長島では米軍基地建設に従事していた本土の建設企業の工事用ダイナマイト倉庫の夜警をしたが、一人だけだったので怖くて寂しい思いをしたが、明け方に浜辺のヤドカリを餌にした釣りが入れ食いだったので楽しかった。米軍那覇航空基地内での土木作業は左官の助手として下水道施設の補修をした。現在も残っている普天間の米軍住宅地域内の家庭を訪問し、英字新聞の購読を勧誘したのは、英会話の勉強にもなった。

那覇にあった沖映本館で当時の中村錦之助と賀津雄兄弟の実演期間中、劇場内で清涼飲料水を抱えて、客席を回って販売した。公演中は販売できないので、客席で待機しながら、錦之助、賀津雄二人の演技をセリフを丸暗記するほど何度も観た。

英語翻訳の仕事は、当時のコザ市にあった国際福祉事務所で、米兵との間に生まれた子供たちの父親捜しのための書類を翻訳しながら、混血児問題や人生の厳しさを学んだ。家庭教師は、米兵と沖縄の女性との間に生まれた10歳くらいの男の子を養子に貰った米人家庭で、その子供に英語を教える仕事だった。何年か経過してから、母親からその子が息子として立派に成長していることを聞いてうれしかった。また、沖縄の高校生の大学受験勉強を手伝い、その子が大学に合格したとの吉報を受けた時は安堵した。

以上のようなアルバイト修業は、決して楽ではなかったが、学業を支えるために絶対必要なものであった。現金収入という見返りがあったのは勿論だが、何よりも、学校教育と同様に重要な社会教育であり、貴重な人生経験であったことは間違いない。

赤嶺棒と赤嶺棒術保存会の活動



津波 一 秋
(筑波大学大学院博士後期課程)

はじめに

小祿地区における村棒（ムラボー）の現況について簡単に取り上げたい。筆者はこれまで赤嶺および具志の棒術保存会に参加させてもらってきた。現在、赤嶺は戦前からの型が一つ保存されており、具志では綱引きにおける巻棒（マチボー）を復活させている（注1）。両保存会とも概ね毎週活動を行いながら、自治会行事などで度々演武を披露している。今回、筆者の参加経験も踏まえながら、赤嶺棒（アカンミボー）と赤嶺棒術保存会について紹介する。紙幅の都合上、具志についてはまた別の機会に取り上げることにはしたい。

赤嶺棒の由来および戦前・戦後時期の状況

赤嶺棒の由来に関する明確な史実は確認できないが、古老からの聞き取りがいくつか残っている（注2）。記録間に若干の違いも見られるが、もともと東風平から伝わったという話は大体一致している。比較的詳細で興味深いのは、赤嶺棒術保存会会長の當間勇氏が具志恒太郎氏から聞き取りした由来譚である。今から200年程前、赤嶺に三線の名手として知られる人物がいた（注3）。その評判は広く知られており、遠方からもしばしば教を請う者が訪ねてきた。ある時、東風平富盛から三線を習いに訪ねた者がいた。その人はしばらく赤嶺に滞在した後に三線を習得し、お礼として棒術を教えて帰っていった。これが赤嶺棒の始まりであるという。

戦前、赤嶺では三線などの芸能はそれほど盛んではなかった。一方、村棒は青年たちによって熱心に行われており、家の床の間にはよく棒が飾られていた（注4）。青年たちは夕方、野良仕事から帰ると村屋に集まって棒の練習に励んだ。先輩から後輩へ指導される中で自ずと赤嶺棒は継承されていた。また、一人棒、二人棒、団体棒、舞方などバラエティに富む型が10以上あり、各自が得意の型を持っていたという。

赤嶺棒は旧6月25日のカシチー綱や旧9月9日頃のクシユックイといった年中行事で披露されていた。また、大正12年、小祿尋常高等小学校（通称「当間学校」）が県内初のレンガ造り校舎として改築された際、その記念式典でも赤嶺棒が演武されたという。

昭和10年代になると戦時体制のため、村の若者が召集されていった。この時期を境に、赤嶺棒は衰退した。戦後、生活が落ち着き始めると、旧小祿村地域の演芸大会で赤嶺棒を披露するなど、一旦は再興の兆しを見せた。しかし、この流れも長くは続かず、娯楽の多様化などにより、1970年頃までには再び行われなくなった。以後、赤嶺棒はほとんど途絶えた状態になってしまった。

赤嶺棒術保存会

赤嶺棒術保存会は2015年（平成27）に當間勇氏が立ち上げ、赤嶺棒を保存・継承すべく活動している。長らく途絶えていたこともあり、残念ながら型のほとんどは失われてしまった。しかし、幸いにも一つだけ保存できた戦前の組棒の型がある。赤嶺の古老である長嶺操氏が記憶していたものを、當間氏が習って継承したものである（写真1参照）。演武者が交互に上段、中段、下段の攻防を繰り返す構成となっている。管見の限り小祿に残る唯一の村棒の型であり、貴重なものであるといえる。現在、この赤嶺棒の型を毎回の活動で練習している。まだ少人数の集まりではあるが、赤嶺自治会の敬老会や小祿地区大運動会では例年、演目の一つとして披露できるまでになっている（写真2参照）。

赤嶺棒の保存・継承を第一の目的としつつも、棒の技術や会の活動に幅を持たせるため、次のような取り組みも行っている。赤嶺棒術保存会は発足時より、東風平の富盛棒術保存会とも交流を

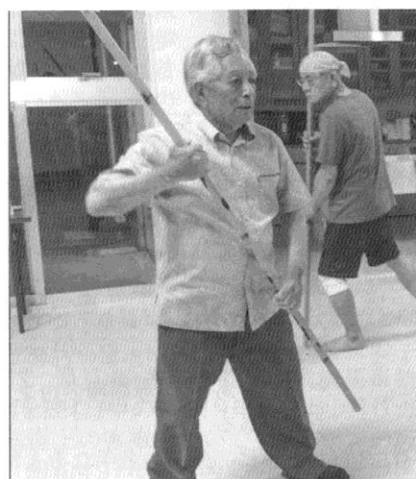


写真1：指導中の長嶺操氏（2019年4月30日）

行っている。赤嶺棒が東風平富盛の流れを汲むという、先の由来譚を踏まえたものである。富盛では毎年旧暦8月15日の十五夜祭りにおいて、棒術が演目の一つとして行われている。富盛棒術保存会は特に十五夜祭りの2週間ほど前から集中的に棒の練習を行うようで、赤嶺棒術保存会も例年その時期に富盛へ伺っている。新型コロナウイルスの発生以後は交流も休止しているが、これまでに富盛棒術保存会からは一方切（イッポウジリ）や四方切（シオジリ）といった型を習うことができた。現在、これらの型も稽古や演武に組み入れられている。

また、通称「前田棒」の使い手として知られる浦添市前田の富本祐宏先生を招き、棒の操作について教授してもらったこともある。富本先生の棒は実に見事であるため、その習得は容易ではないというのが率直なところである。しかし、少しずつ取り組む過程で、棒の扱いなど技術面での向上が期待できる。

最近では2022年6月13日、五月ウマチーの際に御嶽で赤嶺棒の奉納演武を行った。長嶺操氏は保存会の練習に訪れた際、かつて御嶽でも赤嶺棒を披露したと語っていた。氏の記憶ではどういう時に行われたかまでは不明であったが、それなりに思い出深いものにも見受けられた。以降、保存会としてもいつか御嶽で奉納演武を行いたいという意見が出てきた。しかし、赤嶺自治会で六月カシチーやクシユックイは現在行っていない。また、自治会が御嶽で行う行事自体も少なくなっている。保存会としても悩ましいところであったが、「とりあえず直近の五月ウマチーはどうか」という話になり、それを自治会長にも相談した結果、御嶽での奉納演武の運びとなったのである。本番当日はウマチーの拌みが始まる前に奉納演武を行った。筆者も含め会員3名が参加し、自治会長から紹介してもらった後に赤嶺棒と一方切を披露することができた。保存会活動は試行錯誤を繰り返しつつ、少しずつだが着実に活発化しているといえよう。

おわりに

簡単にではあるが、赤嶺棒と赤嶺棒術保存会について紹介してみた。新型コロナウイルスの影響から時折休止を挟んだこともあるが、保存会は今日まで概ね順調に継続できている。基本的に毎週火曜日の午後7時から赤嶺自治会館で活動を行っており、会員は随時募集している。赤嶺棒術保存会は赤嶺棒の保存・継承はもちろんだが、会員相互の親睦をはじめとした人的交流の場でもある。興味のある方は活動日時に訪ねてみてはいかがでしょうか。



写真2：敬老会出演後の集合写真（2017年9月17日）

（注1）本会会報の第四号（2004年10月30日）における赤嶺和雄「宇栄原大綱引き90年ぶりに復活」[p. 3]によると、宇栄原でも2004年に綱引きが復活した際、巻棒が行われたようである。

（注2）赤嶺棒に関する資料として、沖縄国際大学石原ゼミナールが1994年に発行した『旧小禄村字赤嶺調査報告書～那覇市赤嶺・時代の変遷とコミュニティの変容～』にいくつか記録がある [pp. 115-136、特に pp. 119-120、125、130、134]。また、「第二回小禄地区伝統・芸能文化祭」（2017年9月24日、小禄南公民館）のパンフレットには當間勇氏（赤嶺棒術保存会会長：2015～）による紹介文がある [pp. 7-8]。これは、當間氏が赤嶺の古老である具志恒太郎、長嶺喜三、長嶺操の三氏からの聞き取りをもとに作成したものである。「赤嶺棒の由来および戦前・戦後の状況」の内容は、上記資料からの情報をとりまとめたものである。

（注3）ちなみに、三線の名手なる人物の屋号はニヤヤアザナ小などと伝わっているが、いずれも今日では途絶えている。

（注4）現在でも、棒を嗜むか否かに関わらず床の間に棒を飾る例が見られる。

小祿の戦後小中学校史

——慶良喜の丘の高良小学校を中心に——



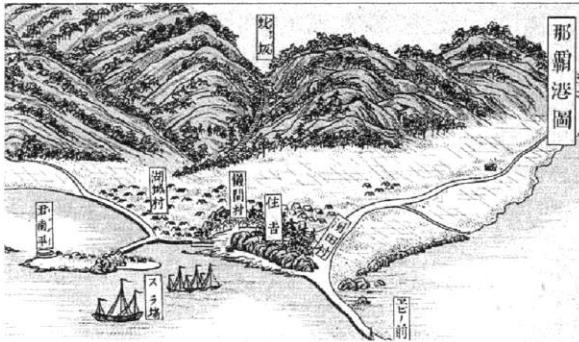
うるく歴文会
幹事 長嶺弘善

1 小祿南北両端(きらぎ)について

高良小学校は我が母校である。6年生になり鼓笛隊の一員として小太鼓を担当した。遅くまで練習したときなど、校庭から西の彼方に広がる風景は、心暖まるものだった。空に広がる夕焼け雲、東シナ海に浮かぶ瀬長島と慶良間諸島があかね色に染まる様の美しさは脳裏に焼き付いている。校歌にある津真田(この地名が本稿の主題で、後述するが慶良喜の誤りである)の丘にそびえ立つ学び舎(学校)は、誇らしかった。

高良小が立地する丘陵、そして糸満街道を挟んで丘が連なるアカムヤー(赤盛屋)近辺を、私たちは<きらぎ>と呼んでいた。高良益人「在りし日の小祿第一国民学校 附:『きらぎ』考」は、小祿南北両端に<きらぎ>の地名があることを記している。高良によると、糸満街道の小祿南端あたりの<きらぎ>と別に、同じ糸満街道の小祿北端、通称<ガジャンピラ>を、糸満の魚売りの小母さん達は「きだき」といついたらしい(『ガジャンピラ第24号』)。但し、原本『聞き書 沖縄の食事』(農山漁村文化協会1988年4月102頁)は、「垣花」にルビ「きだき」を付している。高良は在野の言語学研究者で、「きだき」は「段々のきだ状の道」すなわち階段道を示すものとし、小祿南端近辺の人々は<きらぎ>と発音していたという。本稿では、糸満街道の小祿北端を「きだき」とし、南端を<きらぎ>として区別する。

【那覇港図・蚊坂(伊地知貞馨『沖縄志 巻1』)(明治10年)】
[県立図書館デジタル書庫収蔵(部分)]



が利便性に優れると思われるが、首里から最短で各間切を結ぶためとされており、護佐丸・阿麻和利の乱では軍用道でもあった(『「中城ハンタ道及び周辺文化財」保全整備活用基本計画』中城村教委2015年3月)。しかし、武具を装着して駆け抜けるには相当難渋したであろうし、馬車は通れず、物資輸送に不向きである。実際にハンタ道を歩いたことがあるが、軽装でも高低差には疲れてしまった。何故階段道なのか。例えば首里金城町の石畳道でも、勾配がさらに大きければ滑ってしまって歩けないだろう。その場合は階段道が必要となる。蚊坂は今はもちろん階段道ではない。琉球王朝時代に、那覇渡地から儀間村に渡り、小祿中央部の村(安次嶺・赤嶺・當間)へ行くのに、海岸線から崎原廻りでは、蚊坂を通るより2倍以上の距離となる。それより、階段道でも蚊坂<きだき>を通った方が近道であろう。

小祿南端<きらぎ>も明治初期までは階段道だった可能性がある。そして県道糸満街道整備のために、北端<きだき>もなだらかになり、南端<きらぎ>丘陵も掘削(割り取り=ワイトウイ)により、なだらかな坂道となったと考えられる。糸満街道整備工事は1904(明治37)年から始まり、1908年に竣工している(『高良の字誌』高良宝友会2008年11月・65頁)。また、垣花から赤嶺・高良を通して、豊見城・糸満まで結ぶ糸満馬車軌道も、1919(大正8)年には既に敷設されている。拙稿「近代の小祿地図を読む」中の【1919年小祿地図】(『ガジャンピラ27号』)に、糸満馬車軌道の文字と記号の表示がある。馬が軌道上の客車を曳いて<きらぎ>の坂道を上り下りしていたであろうと想像すると、楽しくなる。さらに、1974(昭和49)年から始まった具志土地区画整理事業により、アカムヤー(赤盛屋)一帯の丘陵は標高29m以下に整地された(『具志字誌』具志自治会2019年3月・108頁)。最も高かったアカムヤーは標高57.0mであった(【1919年小祿地図】)が、もちろん今で

【那覇市立高良小学校】HP
那覇市高良2丁目12-1

高良小学校校歌

作詞 赤嶺 貞義
作曲 糸洲 長良

1. あかねの雲に 色はえて
うかぶゆかりの 瀬長島
津真田の丘に そびえたつ
清く明るい まなびやよ
たのしいわれらの 高良校
たのしいわれらの 高良校
高良校

明治初期「那覇港図」(伊地知貞馨『沖縄志 巻1』)の蚊坂(ガジャンピラ)から湖城村に下る道には横線が引かれている。以前から横線が何なのか気になっていたが、明治初期の実態、すなわち「きだき」=階段道を表していると考えれば納得がいく。湖城村から左右(南北)に伸びる道には横線は引かれず真っ白であり、対称的である。階段道というのは奇異な感じもするが、他にも実例がある。

中城ハンタ道は琉球王朝時代に整備され、首里城から中城城を経て勝連城に至る宿道である。名前「ハンタ」の通り、崖沿いに整備され、石畳道あり階段道あり、起伏に富んだ道である。生活道としては平地の集落を結ぶ道路の方

【中城ハンタ道:県消防学校南側斜面付近(2017年8月撮影)】



は見る影もない。元・アカムヤー最高点座標がわかる説明板を、自治会で設置してもよいのではと思う。

国土地理院地図では、具志区画整理地入口の県道が標高25.0m、その東側の墓地（高良幼稚園の南西側）辺りが標高36.0m以上である。県道が、アカムヤーから慶良喜原（キラギバル）へと東西に連なる丘陵一帯の凹部だったとしても、単純に言えば、高さ約10m・長さ50m以上が掘削されて敷設されたことになる。なお更に東側の高良小校庭は42.9m標高である。「慶良喜（きらぎ）」の語源が「きだき」だったという高良の論説について、これ以上の資料等はなく考察は進められない。

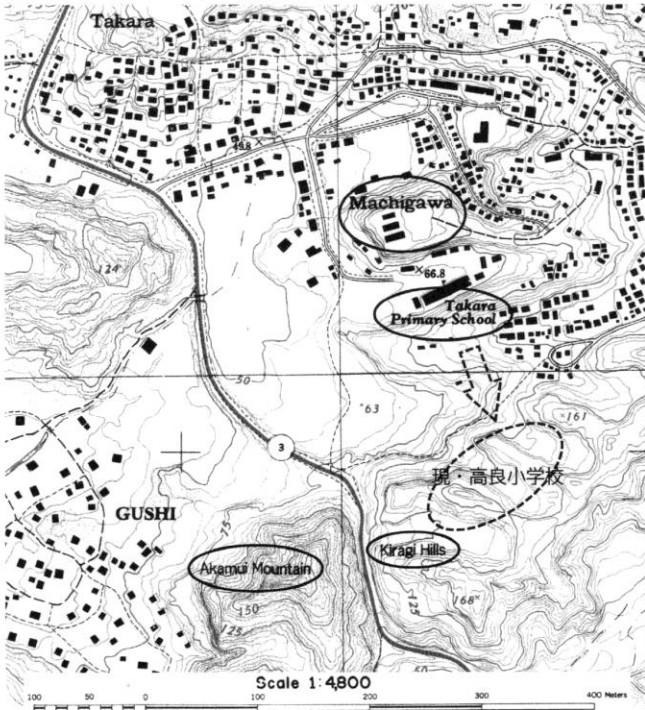
【<きらぎ>遠望（豊見城市瀬長から2022年4月撮影）】
糸満街道（県道）の矢印を付した辺りを、通称<きらぎ>と呼んでいる。



ところで、『沖縄の地籍調査』（沖縄県土地調査事務局1993年3月193頁）によると、那覇市・大字宇栄原に、松川原、津真原（ツマバル）、ハゲラー原、慶良喜原など14の小字がある。また、大字高良に、津真田原（ツマダバル、初版『大字・小字名集』76年14頁ではツマタバル）、仲添原（ナカシバル）、池田原（イケタバル）の3小字がある。単純化して言えば、高良津真田原の低地から南東方向へ、丘陵部にかかる辺りから宇栄原地番で、丘陵部の慶良喜原、斜面の松川原、麓の津真原と続き、3小字ともに豊見城市と接する。

1 高良小は終戦翌年に津真田低地に開校した

【1948年10月米軍作成1/4800地形図 SHEET159 GUSHI】
（1947年10月～48年1月航空写真による作成、県立公文書館収蔵）



1948年10月米軍作成地図に、Takara 集落から南に少し離れて（Machigawa）とあるが、（松川ヌモ）（次の「字高良民俗地図」参照）と混同している。（サーターヤーの上）であり、旧小禄村役場があった。その南側に（Takara Primary School）＝高良初等学校があり、約50m長さの校舎建物が図示されている。

『高良小学校・幼稚園 創立五十周年記念誌』（1996年3月、以下『記念誌』）によると、高良小は1946年2月13日、字高良24番地（津真田原）に小禄初等学校として開校した。47年1月、小禄初等学校（現・小禄小学校）分離に伴い、高良初等学校に校名変更した。米軍地形図は、47年9月頃の校舎（米軍倉庫跡屋根修理完成）に基づくのであろう。その後、52年4月学制改革により、高良小学校と校名変更する。そして58年7月から62年8月にかけて高台に移転した。図中移転先の（現・高良小学校）（筆者記入）は、（Akamui Mountain）、（Kiragi Hills）から続く丘陵地帯である。

移転前の1954（昭和29）年9月1日に、小禄村は那覇市と合併する。「旧小禄村長から那覇市長への事務引継書」があり、小禄村「財産目録」を確認できる（『那覇市史 資料篇第3巻6 那覇市長事務引継書・他』

1990年3月・616頁）。「土地の部」に「小禄中校敷地」として、宇栄原小字田原1061番370坪以下18筆（合計4850坪）があるが、他は全て軍用地で、「高良小敷地」あるいは「高良小予定敷地」は存在しない。財産がある小禄村は「合併前に学校用地を全部村の予算で買って合併して、那覇市には負担をかけていない」という自慢話伝承がある（『記念誌』87頁）。だが高良小敷地については誤りであり、合併前に移転先敷地取得した事実はないのである。なお「財産目録」に、赤嶺原143番3528坪の軍用地（公用地）があり、戦前の小禄尋常高等小学校（第一国民学校）の跡地（現・県営団地）である。また、建物として、津真田原24番地等に「（小禄村）役所庁舎」とあり、初等学校開校地と重なる。

2 高良小は市村合併翌年に慶良喜丘陵に移転が進められた

戦後復興初期に建設された高良小は、児童数が増え敷地が手狭となった。那覇市と合併翌年1955年5月に、市長及び教育委員会あて「永久校地買収促進」に関する陳情がなされ、移転計画が動き出した。『記念誌』に、57年6月整地工事起工式、同年9月建築起工式、58年7月一部移転、62年8月全新校舎竣工し移転完了とある。当然ながら、新敷地整地工事の前に、借地権か所有権を取得する必要がある。新校地選定取得過程を示す公文書は不存（市教委施設課）とのことだった。だが、高良津真田原低地の学校から、目前の南東方向高台に広がる慶良喜原が最適地であると判断することは容易である。那覇市（教委）は、遅滞なく「永久校地」選定作業を進めたと推測でき、畑や原野だった一帯を学校敷地「永久校地」として所有権取得し、整地して校舎建築を進めた。

現在の高良小の住所「高良2丁目12番1号」は1985年住居表示実施によるものであり、実施前は「字宇栄原1486番」であった（那覇市HP・「住居表示のページ」）。そしてこの住所を法務局登記情報で検索すると、2011年3月に他の6筆と合筆され「高良2丁目440番」となり、「畑」から「学校用地」に地目変更（年月日不詳）され、地積「20694㎡」（約6270坪）と登記されている。そこで「字宇栄原1486番」の閉鎖登記簿を確認すると、所在「那覇市宇栄原慶良喜原・原野」と表題部にあり、甲区壺番「大城（何某）の為所有権を登記す」とあり、式番「那覇市の為1956年10月12日買収に因る所有権の取得を登記す」とある。55年5月の陳情からおよそ1年半後である。そして57年6月整地工事、同年9月校舎建築工事と、移転工事が始まった。62年8月までには全校舎竣工し、「慶良喜の丘」に学び舎がそびえ立つようになる。

【高良2丁目440番「学校用地」】
「20694㎡」2011年3月法務局作成
備付地図（4面合成＝筆者konan）



『旧小祿の歴史・民俗地図』（市史編集室78年12月、昭和初期頃想定）（方位が南北＝垂直ではない、〈津真原〉追加＝筆者）



『旧小祿の歴史・民俗地図』（那覇市史編集室1978年12月・現歴史博物館）には、高良集落（建物群）南端道路に重なって〈津真田原〉とある。中央丘陵部が現・小祿南公民館所在地であり、更に南東部に〈慶良喜原（現・高良小学校）〉との記載があり、糸満街道を挟んで西側に〈アカムヤー〉がある。高良小は宇栄原慶良喜原（キラギバル）の丘に移転建設されたことがわかる。〈松川ヌ毛〉の下方に〈ツマダガー〉（津真田井）があり、宇栄原慶良喜原との境界線道路がある。

次の「字高良民俗地図」（『高良の字誌』（高良宝友会2008年11月裏表紙）でも、同様のことが分かる。左上から右斜め下へと、丸囲み文字で〈津真田原〉とあり、宇栄原との境界線が太破線で示され、宇栄原に〈現高良小学校〉とある。宇栄原の小字名（はるな）の記載はないが、もちろん、慶良喜原（キラギバル）である。なお、〈高良小・旧校舎〉と〈旧小祿支所〉も分かりやすい。

高良小は1956年11月に校旗樹立式を行い、59年3月に懸賞公募で校歌ができた。作詞者赤嶺貞義（50年11月高良初等学校教頭、53年8月社会教育主事転出）は、当時文教局主事だった。新校地を何度か訪ね、「あのころは津真田とっていた」「素晴らしい場所だなと思った」と、作詞応募したという（『記念誌』91頁）。選定者不

明だが、作詞者・選定者共に、新校地は「津真田の丘」に立地するという誤解があった。低地にある原名（はるな）「（高良）津真田原」が、丘陵部の「（宇栄原）慶良喜原」まで続と思ったのか、誰か先輩助言者がいたのか、誤解の原因・理由は不明である。学校用地は合併前に村予算で買収済という自慢話伝承者が、新敷地所在地は津真田原だと広めたのか、今となっては不明である。作詞者赤嶺は2014年2月に死去しており、作詞の経緯に関する資料は遺族の元に何も残っていないという。あえて「津真田の丘」を探せば、慶良喜原とは反対方向の、高良集落の北側、高良ヌウタキ（高良御嶽）や高良自治会館の所在地あたりが相応しい。

【「昭和初期 宇高良民俗地図」『高良の字誌』〔高良宝友会2008年11月裏表紙〕】



高良小学校は、誕生の地＝<高良津真田原>の低地から、<宇栄原慶良喜原>の丘陵へと移転した。新1年生として入学式で初めて聞く新鮮な響きの校歌。そして在学中の6年間に主要行事で歌い、締めくくりとして卒業式で声高らかに斉唱する校歌。だが、歌詞の一部は事実と異なる。「慶良喜くきらぎ>の丘にそびえたつ」のに、「津真田の丘」から築立ったと思い込んできた卒業生は、優に1万人を超える。その思い込みは改める必要がある。

以上述べたことを【年表】にまとめた。戦前期小禄村には、小禄尋常高等小学校(第一国民学校、在赤嶺)と、分離校としての(東部)小禄尋常小学校(第二国民学校、在金城)の2校があった。現在の高良小および小禄小と、分離校という点で経緯が類似する。沖縄戦そして1945年3月23日の赤嶺村・小禄地区の大空襲で、小禄村役場・国民学校ともに壊滅した(拙稿『ガジャンピラ24号』)。戦後米軍基地による接収のため、戦前の学校所在地に学校復興することができなかったのは、歴史継承の断絶を余儀なくされたという意味で口惜しいことである。

3 おわりに

<きらぎ>について個人的出来事を記す。上級生のある日、教室掃除当番となり箒で掃いていると、通りかかった同級生の足に当たった。彼は「おおえー(喧嘩)しーぶさん(欲する)ばあい。とくうわ(来い)」と睨みつけ、歩き出した。仕方なく後に続いた。校門を出て右の塀沿いを歩き、幼稚園裏手の墓地まで来た。そこで彼は「うり！」と気合いを入れ、左右の拳(ティージュクン)を握り中段に構えた。殴られることを覚悟しながら同じように構えた。数分の睨み合いが続いたが、彼が拳を突き出すことなく構えを解いた。何とはなしに別れた、ほろ苦い思い出である。成年者であれば「決闘挑応罪」(1889・明治22年制定)に該当するだろう。

戦前、<きらぎ>や<アカムヤー>、赤嶺クシヌモーでは、毛遊び(モーあしび)が盛んだったという。クシヌモー(赤嶺緑地)中央部には、那覇市区画整理事業(1985年～1998年)により、毛遊びを偲ばせる野外舞台が設置されている。活用法はないだろうか。

∞∞07.07七夕～07.25完∞∞

- 【高良小・他沿革年表】(『記念誌』、『那覇市教育史通史編』『資料篇』(那覇市教委)、『琉球史料 第三集』(琉球政府文教局)他参照:湖南)
- 1945. 10以後、米軍政府が地域指定して収容所からの住民移動許可
高良・宇栄原一帯に旧12カ字住民が集落形成
 - 1946.02.10 学校設立委員会開催(校長事務扱い等決定)
 - 1946.02.13 小禄初等学校が開校(02.17附属幼稚園開園)
宇高良津真田原24番地に借地
 - 1946.03.11 地区別初等学校長会(小禄外9地区、民政府文教部)
 - 1946.04. 沖縄民政府「初等学校令・同施行規則」(学制8・4制実施)
各地に開校した初等学校を法令により追認
 - 1947.01.06 高良初等学校に校名変更
小禄初等学校(現・小禄小学校)分離に伴う変更
 - 1947.09.06 校舎(米軍倉庫跡)屋根修理完成
この頃の航空写真に基づき米軍地形図作成・校舎記入
(Takara Primary School) 約50m長さ校舎建物図示
 - 1948.04.01 民政府「教育基本法・学校教育法」(学制6・3・3制実施)
新制高良中等学校発足し高良初等学校と併置
 - 1950.04.05 木造平屋瓦葺校舎落成 6月にも同様校舎竣工
 - 1952.04.01 琉球政府「琉球教育法」による校名改革
高良初等学校は高良小学校、高良中等学校は高良中学校に
 - 1954.04.01 小禄中学校発足(高良中学校と小禄中学校の合併)
 - 1954.09.01 小禄村が那覇市と合併(首里市も同時)
 - 1954.12.01 小禄中学校が宇栄原の新敷地へ(訣別式)
 - 1955.05.14 市長・教育委員会に「永久校地買収促進陳情書」提出
那覇市は遅滞なく永久校地を慶良喜原に決定(推測)
 - 1956.10.12 那覇市は「宇字宇栄原慶良喜原1486番」「畑」買収
57年6月までに一帯の「畑」「原野」買収を順次進めた(推測)
 - 1957.06.28 「慶良喜原」にて新敷地整地工事起工
 - 1957.09.06 「慶良喜原」にて永久校舎建築起工式
 - 1958.07.05 新校地・新校舎に一部移転
 - 1959.03.04 校歌制定(赤嶺貞義作詞・糸洲長良作曲)
 - 1961.10.23 第2校舎(3階6教室)竣工
 - 1962.08.22 全新校舎竣工し「慶良喜原」への移転完了
 - 1963.02.06 新校地＝慶良喜原への移転完了祝賀会
 - 1985.11.05 慶良喜原の住所「宇字宇栄原1486番」が
住居表示実施により「高良2丁目12番1号」となる
 - 2011.03.03 「宇字宇栄原慶良喜原1486番」「畑」含む7筆を合筆
「高良2丁目440番」となり、「畑」から「学校用地」に地目変更
地積「20694㎡」(約6270坪)と登記
 - 2022年6月現在 高良小住所(住居表示):那覇市高良2丁目12番1号
所有者那覇市「学校用地」登記:那覇市高良2丁目440番
《筆者注》住居表示は自治体が定める行政上の土地番号で、
地番は所有権等権利関係を示す登記上の土地番号である。